死は存在しないか？

稲宮　健一

少年時代にガモフの全集を良く読んだ。光速に近い速度で移動すると、相対的に時計が遅れるとか、距離が縮むとか、不思議な世界が描かれていた。その中にビッグバンのことが書いてあったか定かではないが、ガモフは現在の宇宙の開闢はビックバンであるとの構想を提案した。後に全天空から受信できる微弱な電波からこの現象は一三八億年前に発生したと発表され、それを裏付ける現象が観測されたので、これは正しい構想だと受け止められている。

最先端量子科学者である田坂広志は「死は存在しない」説の単行本を出版している。彼は自分の行動が何か自分の手の届かない所から動かされているとの予感を感じていた。霊感とか、憑依はあると主張している。彼の主張の根本はビッグバンを起したこの宇宙は量子真空と呼ばれ、その中に「ゼロ・ポイント・フールド」という真空がある。ここは何もない空間でなく、ここに無限のエネルギーが存在する。確かにダークマターと呼ばれ、解明されてない何かが存在するとの説がある。これが無限のエネルギーかも知れない。田坂はエネルギーの究極は波動だと言うが、この点は通信技術者として理解できる。そして、波動はコンピュータのメモリのように記録ができる。すなわち世の中で起きる森羅万象は総て記憶に蓄積されている。個は死んでも、この世に生きた証は永遠に残るとか。

科学は仮設の設定と、それに対する検証が普遍的な現象で示せると真実だと認められる。仮説の設定と検証を積み重ねて現在の科学が成り立っている。田坂の仮説は壮大な宇宙空間と、この世に生きている人間の脳に詰まっている記憶が現在分かっていると考えられている宇宙空間をさらに拡張した領域に記録されていると主張する。従ってこの記録と現生の人間の生き様に何らかの結び着きあると書いている。人に依っては死によって総て無に帰すと考える仮説もあるが、少なくとも過去の記憶の積み重ねがなければ現在の我々がないことも事実である。

（二〇二三・三・九）

田坂広志著：死は存在しない